

藤原宮式軒平瓦 6643E の 生産地

1 はじめに

藤原宮所用瓦の生産地比定については、軒瓦を製作技法、胎土、色調等の特徴からいくつかのグループに分類し、瓦窯や地方寺院等から出土・表採された同範軒瓦の事例と対応させることにより、大きな成果を上げてきた¹⁾。しかし、藤原宮所用軒瓦のすべてについて検討がおこなわれているわけではなく、特に出土例が少ないものについては、十分な分析が困難な状況にある。

2019年8月20日に、御所市教育委員会保管の市尾（高台）瓦窯表面採集の軒平瓦（以下、市尾瓦窯例と表記する。）を対象に、奈文研所蔵の軒瓦を持込み、共著者全員で実物照合をおこなった結果、これまで分類や生産地比定がおこなわれてこなかった6643Eと同範であることを確認した。以下、概要を報告する。

（清野孝之）

2 軒平瓦表面採集の位置と経緯

市尾・今住瓦窯は、高取町市尾から御所市今住にかけて所在し、從前、高台・峰寺瓦窯と呼ばれてきた。これまで、藤原宮へ供給した大規模な屋瓦生産地と評価されてきたが、近年、石田由紀子や北山峰生による表面採集資料を用いた分析²⁾や、高取町教育委員会による市尾瓦窯側での初めての発掘調査により、良好に遺存した窖窯とそれにともなう6273型式の軒丸瓦が確認され、その歴史的評価の一端が裏付けられるようになった。

今回、実物照合をおこなった軒平瓦は、御所市在住の個人による表面採集品で、現在は御所市教育委員会が寄託を受けて保管している資料である。時期は昭和40年代で、採集地点は市尾瓦窯が位置する独立丘陵の西北裾、住宅前の道路上ある（図18のA地点）。当時はまだ道路の舗装がなされておらず、瓦の一部が野道上に露出していたところを採集したものである。大脇潔が1977年の踏査で、丘陵西麓において赤く焼けた窯跡1基が残存しているのを確認した地点（図18のB地点）からは約140m北方に位置し、市尾瓦窯がこの付近まで拡がっていた可能性が考えられる³⁾。

（金澤雄太／御所市教育委員会）



図18 市尾（高台）瓦窯例の表面採集位置 1:6000

3 6643Eの特徴

6643Eの出土例は少なく、藤原宮で3点、藤原宮から瓦が持ち込まれ再利用された平城宮で9点、平城京右京三条一坊八坪で1点である（以下、藤原宮例等と表記）。今回調査した市尾瓦窯例は、瓦当面の一部が磨滅するものの、文様の細部まで6643Eと一致し、さらに右端の主葉と脇区内側界線との間の範傷が一致するため、6643Eと同範であることは間違いない（図19）。また、市尾瓦窯例は表面採集品であるため慎重な扱いが必要であるが、藤原宮例等と製作技法、焼成、色調、胎土等が共通することから、6643Eは市尾（高台）瓦窯産と考えてよい。

以下、市尾瓦窯例を含む6643Eの特徴を列記する。凹面の瓦当部寄りには、幅3.0~6.0cm程度の横ケズリをほどこし調整痕がほとんど残らないが、そこから狭端側は未調整で、布圧痕、模骨痕、粘土紐継ぎ目が残ることから粘土紐桶巻き作りであることがわかる。平瓦部凹面の一部に、断続的な横ケズリをほどこすものがある。この横ケズリは粘土紐継ぎ目や凹面の割れ目の位置に対応する場合が多く、焼成前に生じた割れ目等を補強するための補足的な調整の可能性がある。凸面は瓦当部寄りに丁寧な横ナデをほどこし調整痕を残さないが、大半の部分ではやや粗いナデをほどこし、細かい縦位の縄叩き目が

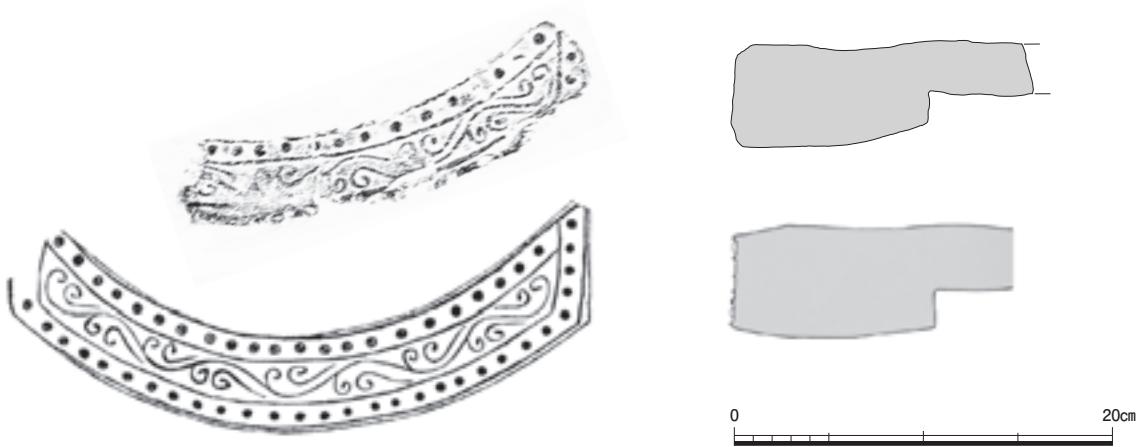


図19 市尾（高台）瓦窯表面採集（上）と平城宮出土（下）の6643E 1:4

わずかに残る。接合部および顎裏面に工具による切り込み痕跡の先端部が残るものがあり、貼り付け削り出し段顎であることがわかる。顎面は横ナデないし横ケズリをほどこすが、顎裏面から4.0cm程度の範囲まで薄く縦位の縄叩き目が残るものがある。

瓦当部の厚さは瓦当面が5.0~5.5cm、瓦当部中央で4.8~6.4cm、顎裏面で4.3~5.6cmである。顎部長は10cm前後かそれ以上で10~11cmのものが多い。顎部の段の高さは1.4~2.0cm程度がほとんどであるが、1点のみ、段の高さが0.3cmと低いものが混じる。顎面の縦断面形はやや丸みを持つものが多く、そのため瓦当部中央付近がもともと厚くなるものが多い。なお、平瓦部狭端まで残存するものは全長が37.8cmである。

瓦当部側面にはケズリをほどこす。脇区外側界線に沿って側面を削りおとし、両側面はほぼ平行する。瓦当部側面と凹面の間の面取り幅は1.4~1.7cmとやや狭い。このほか、顎裏面の瓦当部側面寄りに面取り風の横ケズリをほどこすものがある。この位置のケズリは粘土円筒分割後にほどこされたことがあきらかであるが、その目的は不明である。

焼成が非常に良好、硬質で青灰色から淡褐色を呈するものもあるが、焼成がやや良好、やや硬質で黒灰色から明灰褐色を呈するものもある。胎土は密ないしやや密で、直径0.3cm以下の長石、茶色粒を多量に含み、直径0.2cm以下のクサリ礫を少量含む。クサリ礫がやや少ないものの、従来の藤原宮出土軒瓦分類ではCグループに属するものと考えられる。
(清野・石田由紀子・道上祥武)

4まとめ

今回の調査により、これまでにグループ分類や生産地比定が困難であった6643Eの生産地を、市尾（高台）瓦窯に比定し得ることがあきらかとなった。藤原宮造瓦体制の解明に向け、着実な前進であると評価できる。このほか、所蔵者および御所市教育委員会の協力を得て、理化学的手法による胎土分析をあわせて実施し、今回の考古学的調査の成果を補強する結果を得ている⁴⁾。

藤原宮における瓦の生産・供給の実態については、不明な点が多く残されている。今後も引き続き、さまざまな手法を駆使し、調査・研究を積み重ねる必要がある。

本研究は、JSPS科研費JP16K03178による成果の一部を含む。
(清野)

註

- 1) 大脇潔「屋瓦の製作地」『藤原報告Ⅱ』1978をはじめ、研究が蓄積されている。
- 2) 石田由紀子「高台・峰寺瓦窯採集の瓦磚」『紀要2011』、北山峰生「高台・峰寺瓦窯における造瓦体制の一試考」『考古学論叢』34、奈良県立橿原考古学研究所、2011。
- 3) 大脇潔「東京国立博物館所蔵の藤原宮式軒瓦－瓦窯出土例を中心として－」『古代瓦研究V』奈文研、2010。
- 4) 萤光X線分析と偏光顯微鏡による鉱物組成分析を実施。詳細は清野孝之・降幡順子『螢光X線分析と鉱物組成分析による飛鳥藤原地域出土古代瓦の生産・供給体制の研究』平成28~令和元年度科研費成果報告書、2020にて報告した。